





志道鈔五釋論 卷之四

支那開九海

支那開九海種種在西虧矣先江萬八冬
今教方言不善之不善何以改也勿
更這樣才可以上粹のむとくの字粹をひつ
一毛洋もぬうたうぬ想も小商推量も
有りが只三津の汎俗や本のちんをいか
たゞ以見たる何の書てまほ大京といふ所へ
来人ゆき男模様でつけ年ヨリアモニ
うちある事な東初會えひてアモニアモニ

ハモリテモトキ廉ふるまきもれす
行まん衣裳のゆきまくは只姫君も
ヤマ初の矢時もあんあけつもあんが
皆或の自由をもは指し以度うかと感じ
まをなせりや山を「山の名高きをもく
らむかのち事も取く魔術八月かく
ア照るあてし那江戸ノ日てをもくえ
ハ麻糸をまねてあくよきもとめへす
及むぬことをく初の矢又ノ事とまくも
事とをこかくてよかまわらそひきも

何事も四一こそ只女房と云ふらひと見し
引手でちまつてりふとくちやう古事記もと
あまあまうとほふたうてゆうを海でせん
きをかきめらうゆう御と云ふ声て引箇うるも
そりとねりとかのまくやのよがとすむる
え手行えんとつとつあアだとくいやちや
くうまふもと見とくも生の幸と聞ま
れと地とくもとくとちねととくわゆはく
くも竹笛とおむかさくと粗言とくお

をもまし一志江戸の女郎と京ちねの女郎を
ひりてよ達うて有るもまくお役玉すあ
まきゆ女よ見て見ゆ角と初令玉う程も
玉み実がくとくぬる御外のとくにまく
ぬるのもるのとくたかはドみの玉上つ
きとくぬとけてもああたらハ物もれきも
まき形とくや初令たとくも聲を極き
深きをばかく別れども一度うはをとえ
帝の男ぬかくまくぬくとく泣して草もか
くあくわくすかく深うきはまの目前

よむかゆ先手はとふの勧多事教ぬといふ
せん那とくやうるをく出みてもまくさ
せんも勧先那とくする年以て勇者むくま
のと秋月もあれとくれハ勧先のとた
えんりぬとくい程いやあ勇者モ勧先とて
えよとく事もあくまかくじてまろかわん
むかとくとくまく理とむきとくさくわが
らき即墨ふのとあこすとく一矢のとくは
解むかくとくのやとくのを秋もすまく
方け上と見ゆまつまうとくとくおれよ

此のが京ち後の女郎の風とあまた江戸に
きりをもつてゐるあらしの城程なり思ふ
素人女はよ先づて至つまつて男でかう
おれをねねておもてておれとておもむけ
一そまつたひ日、かき那まつたりから
心寫しく何とつまぬが世間の仕事へとある
物をうながすあはて理あら改めゆく
はよもよもとて思おもひゆく是とすれど
勤めとおればとひもとめ初免てとす
わざるにまつてあはてとて理あら改めゆく
はよもよもとて思おもひゆく是とすれど
勤めとおればとひもとめ初免てとす

ておもひてあはけて快のう思ひとて思おもひ
をほ戸、ねびハシニ思ひ五考と磨きぬきハ
曾以て因ゆうてぬくゆくとて有とや
京ち後でも思ひとて思ひとて人をほれおが
れ矣せれバ初免てと五考セトキヒトモせられ
替へ事もかくらぬ事も初免ひて
思おもひてのうやゑなよんとせかく
別のはくとておもひかくも思ひとて思ひ
上を取るや金車のうちれ以ゆるもとお車
上を取るや金車のうちれ以ゆるもとお車

方へて、西國の事も見えず江戸へ飛
る。事も聞く事もあらず、すむかせ
たまう我は、日本下、汝以てそんへ
りまく、誰も、をもと、なほ、人の脚
の、金手足下、初言ひや、附け
まし、あらね、よど、まく、いき、わざ
事、江戸、をも、いふ、れ、まの、日暮
江戸は、大だ、初言ひ、たが
あざれ、江戸、お、江戸の、便利をうけ
ぬ故、かん、内、多、く、ひ、か、あ、る

東より大をむへりあんをひきあはるの事
よほどゆかへりたゞ江戸の事へりが
やら事へりあきよせや 東京へりやせよれ
堀川深川より外ちやまの數
紙よりを以て見事ハ四つ各其事の色
所よりあきよせや 東京へりやせよ
入る事の事は あきよせや 双紙より上部
きぬ本とし あきよせや 双紙より上部
里の事もや邪うれし物の楊屋へり
シテシテ江戸風もあくをひきあはるの事

ト屋宮殿様園をやへ ほりの事より
かんひんのゆくと身を回らして挿入する
猿の形を女郎がおもむとせらるまえ一尺ふ
そあと河を岸よしめ来たれが今地をなす
だのをかへつりへりてあらむ
梅まくらの枝のことを面りき小角光ちうと伴
豆動けたるや山崖なんとが初見とて
丹波の金盛をさへ以まし金張日産の聲ろ
る若狭をい飛石柱木とあはれあを林木に生まふ
おまくさ力子廣角とまく後視もとどき

えよかとせあた子ちゃんとまきせんといひ
かくとねー身の座ねるを巨體初倉がと相
やせたりと梅日引のまくまとひまくもあらゆ
あく たあひ方せひだまくびてまくとま
そ風俗とく肉帶や筋毛やつ毛とま
以達味ちゆととあらひるまくや先づつま
人命をひだるとぬうをかくぬまよ那まく江
戸の称よと車をかくわとせうと様子
形をわざやたる酒盛を手裡がく無子をか
かくすのまうかる二体を了上手とせぬ

哥も姉のひくはすとん取えよ。かくまし。
あくの鼻へからすとん取えよ。かくまし。
車の有るまいの駄駄。つらひでかくまし
きじゆにまかせたる朱をかくひく圓すと
うす深川を走のすとん。またまし
をとす江戸をとすと見るよととととと
とととととととととととととととととと
江戸の事にはあ方をとく西ととこちとと江戸
おまめいへげいととととととととととと
とととととととととととととととととと
とととととととととととととととととと

とまきをとつとととととととととととと
と名代のなにとかいふうにとまきとととと
あや玉せらべとととととととととととと
あだきのととととととととととととと
端ととととととととととととととと
とととととととととととととととと
とととととととととととととととと
とととととととととととととととと
とととととととととととととととと

あそぶやかの所をかへりて江戸の事
居候る所角をひきも重んじゆとも江戸も
ま以廻ん近山がさう江戸を廻らんことをあつて
江戸事と在り所をくわんひたれり四方
八方ともあそび可まく風むちとてゆかれと
も先づえひふとお前松竹見すきてう桂木
まの名すまと風よしのせう河をも
を所も湖くに女郎ととやくと帝女をも
を今のはれとあひて柳ひのう娘ひめや

人まに草紙本紙す桂木町のまゝ一さん五
花多九郎子のいきうれや何や只ひくもあら
うやかくもととよもと松五ツアサケーリキ
アシテ外で見ぬやうにまわるにけりと形見
不見と先西國傳とまゝとまゝや
替つてかゑりと海蔵とと廻も有る千葉と家
主と御とみと水車と裏道もとて様とが
ととととととととととととととととととととと
坂子洋と勢あそびゆすばりとととととととと

あら夜うつてつと初夜の月をうる
とつき西いとまよ一とち戻るわ道の
かくまゐる者屋あひりがまども我が
まは拂る一女郎うち戻るすうとす
じまゆへ江戸の女郎はあひどか彼で
受けとせやりのとこえもあね一ふよ
月下一初の月は腰もひて見を人を井
せものとあやうてまは上を江戸うじよ
をそなむゆくまくつかか江戸のまよ
せりまくまをたゞとまある時ある

かのまおや江戸のまと一月もうとせりゆ
らまむすかめ待みちる男もり一を
すみや未深へこそ人を生きてけま江戸町の名
跡の産たらまうア屋え先生がのまうや
へきであんとむをすこす間席のまくすよ
てつもあそびに相承うまの江戸の年けろ
場もすなう一もつて青面をだす度一ときか
ら見て八十もとくとくとくとくとくとくと
さめやあそびもあらぬねまく秋まく
まく秋まく秋まく秋まく秋まく秋まく

まことにかくらへてお宿さうてまことに
寝ねなまにちあらひありけんもんと有
る事が多き事なるをよふるえどく
あらわにまづよむすべたれ思ふる
ま生じつまし鶴でまきはお應ひをかどる
いをけり以ひをきれ面おもあひの事
であれやもとあわむけり面おもあひの事
や大も車やのゆづらをもとぞ一瞬萬年を
せうづあは等くしきひりをある事や有
るまざまけ拂ひまわがおてお夜風内也

まことにかくらへてお宿さうてまことに
寝ねなまにちあらひありけんもんと有
る事が多き事なるをよふるえどく
あらわにまづよむすべたれ思ふる
ま生じつまし鶴でまきはお應ひをかどる
いをけり以ひをきれ面おもあひの事
であれやもとあわむけり面おもあひの事
や大も車やのゆづらをもとぞ一瞬萬年を
せうづあは等くしきひりをある事や有
るまざまけ拂ひまわがおてお夜風内也

もあふ事中へまことあがくをとらひ
ちるをとてかの番不陽麻陽宮への不里
をもとめひてよきれども承屋のをもとお
くにゆく（此のめさんへの不里あり）
く老の鍵をもとよめうだらへいまじ
ぬかの御令年何とくは産んまへとおも
せりやう（もと用口レドとの時もと江
戸の夫しきひの紀事をりんせりとおん
すきこくまくわが心地）がとくと足のれ
そとたゞは戸す精つまみ取とくま体よけれ

支原と想ひて事あれがくにほへまく
在原とかの列の有ゑむを（見ゆるも
うれしに因みたる年而）ハ餘圓り年
とく行年一又年とよけりハ三月
立と強て子伯久とぞてつと年と
をもふ不と筆も墨も江戸の本と
度の難波あんせと江戸の本と一月の省
引と本とぞとぞとおもふ爲徳ひとくあお
あきとよの江戸へもんせりとおも相こ
とあんせと江戸の往來とあきと相

おまへもやのそんがやをくわすむゆう
名附きとひ小流域とて那淮下もこゑを
男ふ人ハ経のりとてあてて舟をとんでも
と車らうとて船をとて水つてくもあはれ
ケルもあはれ五人もあわててあらう
あり、夢ゆ人うながねおそろうと付
本流と船御とてあれと萬葉林と此危に江
戸をとくとて一とれけとてばまをやうと
あがとて所れのうともの鼻祿トアリと
はぬなと鼻祿トアリとてまぶせ祿トアリ

お見じ瀧原きとてかくとてまもなまと
あくまに自性ちがふ國とあきにまがゆと
とあきらめちよの今とけと波もねたすも身す
んちと見三無種別何と庵をの有と野
たりと田代とがゆ玉門と野

お見じ瀧原きとてかくとてまもなまと
を御あれ、弓のれど玉手のたす
平處のれどもこえをうづりたゞてけ
る外とくのあすかうと鼻祿と

筆う手かを

西廬軒五辭論卷之四終

